古典日本語の世界

1. 文字の文化世界の形成

　　文字・・・社会的に機能しているか否かが重要。一、二つの文字があるだけではダメ！

　漢字を受容し、読み書きの世界を形成した過程・・・自発的・内発的に生まれた訳ではなく、

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　政治の問題として外発的に生まれた。

　一世紀・・五七年、倭の王が後漢王朝から冊封を受ける。

　　　　　　＝朝貢の際、印を使用した国書を携行しなければならない。

　　　　　　→中国王朝のもとに文字の交通のなかに整備され、文字を用いなければならなくなった。

　　　　　社会の内部で文字が機能したことを認める資料はない。

　五世紀・・文字の内部化（＝社会内部で機能し、意味を持つようになる）

　　　　　　列島内で、服属関係が結ばれる。それが特別な文字（モニュメント）に担われている。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（注）文字の一般的日常的な広がりは証明できず

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　→文字の内部化も政治の問題

七世紀後・・社会的に広く用いられるようになる　日常的に用いられる文字

　　　　　　文字による行政　　　　　　　　　　　　　文字の変質を伴う　　非漢文の誕生

　八世紀・・律令国家＝成文法に基づいて運営される国家

　　　　　　古事記・日本書紀・万葉集

　（重要）中国を中心としたひとつの文化世界が、政治関係をベースとした文字の交通としてなりた　　　　　　　　　　　　　つなかにあり（文化世界が政治構造（冊封と呼ばれる体制）として成り立つ。）、その中国を中心として広がる文字文化の世界の中にローカルな営みとして、列島の文字の文化世界が形成された。

　このローカルな営みとしての、列島の文字世界を成り立たせていたのが文字学習である。

* 文字学習・・・実際の用例に即して学ばなければならない。典籍を読むことが必須。

　　　　　　　文章としてのかたちを学ぶことが必須。＝教養を身につける他ないということ。

　　　　　　　　　（逆に言えば、この教養こそ同じ文化世界にあることを保障してくれる。）

* 『論語』、『千字文』　　→テキスト（典籍）の学習とともに文字が学習された。
* 字書、類書、詞華集、注→原典によらず、知識を得ることができ、教養を会得する役割を果たす。

（代表例）　『文選』（詞華集に分類）‥献詩、遊覧、贈答、ありうるさまざまな場面における詩

　　　　　　　並べている。世界のなかに考えられる主題を、百科的に知れる学習事典だといえる。

　　　　　　　こうして、教養と表現見本とを一挙に獲得できる。

政治的には中国皇帝を中心とするが、文字の交通は列島特有のものではなく、文字学習を通して教養を共有（段差がない、中心がない）することから成り立たせる。こうした教養の基盤の共有は右に挙げたような典籍、字書、類書ナドを通じて多重複線的に学習されるものであった。

1. 漢字と非漢文の空間―八世紀の文字世界―
* 訓読による学習とそれがもたらすもの

　七世紀後半に文字の拡大は、訓読による学習を通して可能になった。

自分たちのことばと切り離された読み書き（漢字）から自分達のことばとつながる読み書きとなる。

ただ、その訓読のことばは、人工性がある点で生活（日常）のことばとは異なっていた。

　こうして訓読が定着することによって漢文でなく書くこと（＝非漢文）がなされていった。

非漢文の例（P35）

「山名村碑文」・・・語順が漢文のものでなく、日本語そのままの構文に漢字を並べたもの。

　　　　　　　　　　　→訓読がこのような形の非漢文をもたらしたといえる。

　　　　　　　また、この碑文に出てくる「娶」と文字は「メトル」と読むが、大昔の結婚が妻土問い婚であったことから、この男性原理の「娶る」という言葉自体が生活のことばの中にはありえず、訓読を通じてもたらされた人工的なことばであることを示す。

非漢文の多様性（P39）・・・訓主体、交用・仮名主体

○文字世界の全体像の図式化

　　漢文

　　　　　　　　　　　　　　字

　　　　　　　　　　　　　　漢

　　　　　非漢文　　　　　　　　　　読み書きの空間

　　訓読のことば　　　　　　　　　　訓読のことばは、生活のことばとつながりはあるが、それでも異質な

　　　　　　　　　　　　　　　　　　人工性をもっている。この訓読によって自分たちのことば（生活のことば）

　　生活のことば　　　　　　　　　　と、外国語文（漢文）のつながりを確保し、文字の国家を可能にするよう

　　　　　　　　　　　　　　　　　　な読み書きの空間の広がりを実現している。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　（注）この読み書きの空間において、漢文から非漢文まで段差がなくひとつながりにあった。例P47～P51

　　　　　　このような文字世界のなかに、「古事記」、「日本書紀」、「万葉集」は存在している

1. 古事記―「神話」、「伝承」という名の虚構

　「歴史」をかくこと→自分たちの作った「世界」を確信するための自己確証

『日本書紀』・・・文字の文化国家としてつくりあげてきたことを語り、それが大昔から今の自分たちとひとつながりのものであることを確信するため。

　　　　　　　　　共通の基盤の中の文化をそのまま実現し、それを自ら作ったものと確信するため。

『古事記』・・・文字の世界の中で、文字とは別のところに存在していたオーラルなことばの世界としての「古代」を語る。

　　　　　　　「伝承」とともに、固有の文化性を語ろうとしている。

『古事記』のスタイル

　　　　・・・非漢文（漢文の文法という秩序なしに、漢字が連続するなかにあった）

　　　　　　　注・助字が意味の切れ目をつくる。

　　　　・・・継起的に物事を羅列するのみ→内面に立ち入ることはなく、伝承としてあったものも語らず。

　　　　　　　『古事記』は文字についての働きを語らない

　　　　　　　　　　→文字が外から来たことを強く意識して、自分たちの「古代」が文字とは別のところにあったことを語りたい。

『日本書紀』・・・漢文。時間的に整合性がとれている。

　　　　　　　　文字を用いることを明確に示していて、文字による国家の運営を強く意識。

1. 万葉集

『万葉集』・・・ウタは本来口頭のもので、書かれるべきものではない。

　　　　　　　　→書くことによって、（自分たちが作った）「歴史」の中のウタを示し出す。

　　　　　　　　→ウタを固有のものとして確証する

　　　　　　　　万葉集はウタの世界の広がりを表し出すものだが、そこにあったのは実際にあったウタの世

　　　　　　界の反映ではなく、人麻呂歌集が開いたウタの世界が、自分たちのウタの世界だと示し、固有の文明性を自己確証。